琉球大学学術リポジトリ

地域連携教育と教育実践：教育実践研究・演習における学生の学びに関する一試案1-1

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
	公開日: 2018-09-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 服部, 洋一, Hattori, Yoichi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42465

地域連携教育と教育実践
―教育実践研究・演習における学生の学びに関する一試案 I-1―

服部 洋一

Practical Education Study & Exercise
under the Regional Close Cooperated Education
Suggestions for the University Students' Learning
in the Practical Education Study and Exercises I-1

Yoichi HATTORI

論文要旨

現在、教職系大学で教員養成の最終的ブラッシュアップ科目として取り組まれている「教職実践演習」の目的と意義について、まず文科省の意図を掲げ考察する。次に国立大学法人琉球大学教育学部音楽教育専修において、同科目とその前提科目として位置付ける「教職実践研究」の 2 科目の内容を「地域連携教育」に焦点を立てた取り組みとした経緯について述べ、ケーススタディとして、地域の小学校における地域連携教育の実態観察記録を踏まえ、この授業を通して本学学生が、地域連携教育をどのように理解し、意義を見出し、自らの将来においてどのように役立てていこうとするヒントを得ているかについて本論は、地域連携教育を教職実践演習に取り込んでいくことは、非常に意義深く、教員養成課程最終段階にいる学生たちの教員資質向上のために効果が高いことを詳述するシリーズ論文である。

平成 29 年度から筆者は、授業科目「教職実践演習」、また本学教育学部音楽教育専修が、その前提科目と位置付けている「教職実践研究」を担当することとなった。「教職実践演習」とは、文科省によれば、「教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた『学びの軌跡の集大成』として位置付けられるものである」（文科省 HP）とされている。そのような目的のために、さらに「学生はこの科目の履修を通じて、将来、学校教員になる上で、「自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできる」（同）ことが期待されている。そしてこの科目の趣旨を踏まえた上で、次のような内容、すなわち

1. 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
2. 社会性や対人関係能力に関する事項
3. 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項
4. 教科・保育内容等の指導力に関する事項

が、盛り込まれていることが望ましく、これらはみな教員として欠くことのできない資質として

琉球大学教育学部音楽教育専修 教授

位置づけられ、この科目の「企画、立案、実施に当たっては、常に学校現場や教育委員会との緊密な連携・協力に留意することが必要である」（同）と示唆している。

但し、注には「課程認定大学においては、本科目の中で、上述の授業内容例を必ずしもすべて行う必要はなく、科目に含めることが必要な事項 1 ～ 4 が全体として確認できるよう、適宜、組み合わせて授業を編成することが望ましい」（同）とあり、上記の 4 項目は、教員の資質を身につける上でどれも重要な本質ではあるけれども、すべてを欠けることなく網羅的に扱う必要はないものとしている。

この分野における、各教員養成系大学における取組みの実態や、その先行研究としては、兵庫教育大学「『教職実践演習』の実践に関する研究」（別惣他、2014）が、更にそれまでの先行研究について触れており（日本教育大学協会年報第 32 集）、横浜国立大学教育人間科学部での実施検討（福田他、2009）、群馬大学教育学部での 2007 年後期以降の講義、ロールプレイ、集団討議等での実施（斎藤他、2010）、千葉大学教育学部の提案（佐藤、2012）、信州大学教育学部の取り組み（伏木他、2011）、弘前大学教育学部の「教員養成総合実践演習 I・II」（和久、2010）、琉球大学教育学部の「プラクティススクール」（小林、2008）などを掲げている。しかし、実際に「教職実践演習」への取り組みの前段階として、後述する文科省の示唆を踏まえつつ、音楽科として「地域連携教育」の実態を観察・調査し、後期の「教育実践演習」への十分な備えを学生自身が得ることを目論んだ科目立案について報告したもの、或いは、その授業内容の実践的報告と研究等については、いまだ先行研究や事例報告が見当たらず、今後、学校教育において子どもの学習と成長、社会性の向上のためにもますます積極的に取り組まれ、活用されるべき地域連携教育について、またこの教育推進方法の発動機として活躍している「地域コーディネーター」の存在とその活動を披歴する内容についても、大学関係者が詳しく語り、論文として発表されたものが乏しい状況にある。また、筆者は今回の研究をとおして、この地域連携教育を推進するにあたり、これに付随する学校長の取り組み姿勢や考え方の大切さと同時に、学生を送り出す大学の積極姿勢の重要性を取り扱った研究もなされるべきであると感じた。このような意味から、本論文はひとつの意義を持つものと自負している。

琉球大学教育学部では現在、科目「教職実践演習」を 4 年生という、教員養成課程卒業前の最終段階における教師力ブラッシュ・アップの機会として位置づけ、既に 3 年次・4 年次で、主に附属小中、或は公立小中学校で教育実習を経験した学生たちが持つべき、教員資質の更なる向上のための科目として実施している。

さて、本教育学部音楽教育専修では、「教職実践研究」を、「教職実践演習」の前提科目、すなわち「演習」への準備段階として、学外の小中学校、特別支援施設などで行われている教育実践の実地調査、フィールド研究を主に扱い（これは文科省が授業内容例として挙げているうちの「（前文略）…事例研究、学校における現地調査（フィールドワーク）等を通じて、社会人としての基本（挨拶、言葉遣いなど）が身に付いているか、また、教員組織における自己の役割や、他の教職員と協力した校務運営の重要性を理解しているか確認」（同）したり、「（前文略）…事例研究等を通じて、個々の子どもの特性や状況を把握し、子どもを一つの学級集団としてまとめていく手法を身に付けているか確認する」ためのものとして位置づけている。筆者は、このような観察実習による「研究」を前期に行い、これに基づく「演習」を後期に行うよう設定しているものであり、設置以来平成 28 年度までは、前任者が特別支援施設において音楽（療法的）活動を中心とした支援教育活動の観察と演習を扱っていたが、今年度からは方向を変えて、「地域連携教育」に音楽科学生がどの様にかかわっていくかについて着目してはどうかと考案し、上述した文科省の示唆に沿って、企画、立案、実施に当たっている。またこれを、学校現場及び教育委員

会との連携・協力のもとに進めることとしているが、平成 29 年度からの着眼点が「地域連携」であるため、まずはこの企画を、琉球大学が存在する沖縄県中頭郡西原町役場の生涯学習課と連携を取ることとし、本論でも紹介する地域コーディネーター及び、観察実習の機会が得られそうな候補の中から西原南小学校の校長とも連絡を取りながら立案を行った。

本論文は、今後の教職課程認定大学における科目「教職実践演習」を実施するための一試案を供する目的で書かれたものではあるが、この科目において地域連携教育を取り入れることが重要であると考えたことについての説明をはじめとして、地域連携教育を取り入れつつ、教職課程認定大学が、同科目を実施しようとする場合に必要な人的ネットワークについての情報を提供し、また事例にみる地域連携教育の内容を紹介、地域連携教育を執り行う際の留意点、そしてその周辺情報をも提供しようと考えている。

また今回、このような授業立てをしたからこそ、初めて知ることができた側面が非常に多く、それらを記述し後世に残すことは、今後、教育系大学における教員養成科目内容を決めていこうとする時にも、価値的であろうと判断するものである。

特に、地域連携教育を取り入れていこうとするとき、欠くことのできない存在に地域コーディネーターがあり、地域コーディネーターと大学教員との連携・情報交換が非常に重要になってくることも解った。そしてそもそも地域コーディネーターという、地域における教育活動に貢献するばかりでなく、学校内部における教育に対しても意義ある仕事をしている人たちとはどういう存在なのかを紹介し、実際に今回、大学と学校を、そして学校と地域の人材とを繋いでいる地域コーディネーターにも、直接インタビューを行い、情報を収集した。このことにより、地域コーディネーターの活動内容と地域連携教育の実態とその価値、学校教育に与える意義に迫ることもできた。実に、彼ら地域コーディネーターの存在によって、地域の知と技がどのように学校教育現場に対して、価値ある教育提供として活かされているかについても、順を追って論じていきたい。そして、当学部の音楽科の学生にとっては、これまで体験したことのなかった地域連携教育の現場を観察しつつ、彼らがここから何を学んだかについても触れていきたい。

1.0 教員養成課程における学生の学びを、地域連携教育の視点からとらえること

地域と大学との関係性において、磯田文雄は「大学は、教育研究のリソースを地域社会から獲得する。新しい研究の萌芽、解決すべき課題は地域社会にあり、大学がそれを取り出し、取り組んでくれるのを待っている」とし、大学内で創造された理論とモデルは、地域社会において「実践され、応用され、実践化されていく」（磯田 2013）と述べている。学校教員養成においては、実践的能力の育成が何よりもまず重要であるといっても過言ではないが、教員としての基礎を身につけるためには、一方で「学校現場での観察、参加、交流が重要」（同）であり、「具体的なかかわりを、学校の子どもたちと現場教員の方々と持つことにより、教員としての姿勢と心根が育っていく」（同）のであると述べている。

筆者は、大学における学びと教育現場における観察・実習だけで、教員の資質が十分に育つわけではないと考えている。2005 年 1 月に打ち出された中教審答申（「我が国の高等教育の将来像」）では、「大学は、教育と研究を本来的な使命としているが、現在においては、社会貢献を大学の『第 3 の使命』としてとらえ、社会の発展に貢献する重要性が強調されるようになってきている」（同）としている。こうした第 3 の使命を踏まえつつ、眞田雄三は、「大学においては、長年の研究によって取得した知識・技術について、教育を通して学生に伝え、社会貢献を通して、更に幅広く社会に活用・応用され、地域の人々の生活改善や地域の活性化などに役立つようにすることが大切である」（眞田 2013）とし、さらに、「学生による地域連携の活動は、地域の活動

を支援するとともに、学生自身が実践的な力を身につけ、応用的能力を育てる良い機会ともなっている」（同）と指摘している。概して、大学内で教育的理論と指導技術を学び、それを教育実習の現場において発揮しつつ、教員の資質を身につけていくということは、従来すでになされてきたことであるが、上述の「第 3 の使命」感をもって地域連携教育について学び、また地域教育貢献を実践していく中で、それまでの大学の授業では学びえなかったものと出会い、新たな学びを身につけていくことが、重要視されるようになってきていると筆者は感じている。教員養成課程のカリキュラムの中で、様々な形での学外ボランティアを経験する学生も多いが、大学内と実習校内という二極的な学びの場以外にも、地域社会との接点をそれらの間に介在させた、もう一つの学びの場「地域連携教育」を取り入れた教育実践についての情報摂取と、実践を通した意義の達成を経験することが必要となってきている。眞田は言う―教育の基本的な使命は、人格の完成を目指し、個人の能力を伸張し、自立した人間を育てることと、社会の形成者としての資質を育成することの 2 点に大きく集約することができる―と。すなわち、個の能力を伸ばすこと、と同時に、社会性を身につけることという両輪バランスのとれた資質向上を目指すことが重要なのである。教員養成プログラムを通じて養われてきた個の力が、社会においてどのように役立っていくのかを学生は確かめ、不足があればさらにその社会性を拡張していく機会に、「教職実践研究・演習」という、学部教員養成課程最後のブラッシュ・アップ編を通して出会えることが必要とされるのではないだろうか。

1.1 学校教育における人的資源不足部分を地域連携の視点から解決する

今回、地域連携教育について教員養成系の、特に音楽科の学生が理解を深める必要があると感じた筆者は、まずは琉球大学がその住所を持つ沖縄県中頭郡西原町の町役場、教育委員会との連携をとる意味で、同役場生涯学習課に赴き、その職員に「地域連携教育の場を 4 年次の学生に観察実習をさせたいと考えている」旨を告げ、町内にどこか受け入れてくれる小中学校はないかと依頼した。比嘉清美職員から説明を受けているときに、初めて地域コーディネーターという役職の存在を知り、この活動をしている金城幸（きんじょうみゆき）氏と連絡を取ることを勧められた。筆者は 2016 年度に、地域への教育貢献を兼ねて、西原町に存在する複数の小学校児童 20 名ほどを集めて音楽ワークショップ「リズムで遊ぼう、みんなで歌おう！」プロジェクトを当時 2 ～ 3 年次の音楽科の学生とともに行っていたが、この時に西原町役場生涯学習課との関係ができ上がっていたので、ここに相談しようと発想を持ったわけでもある。またさらに琉球大学総合舞台芸術研究会（琉大ミュージカルの OB/OG が中心となって組織したミュージカル制作団体）と西原町さわふじ未来ホールとの提携で平成 28 年および 29 年の 3 月に 2 年連続公演を、西原市内の小中学校に通う児童生徒を交えて公演したミュージカル「にじいろファクトリー」を通しても西原町役場生涯教育課との強い絆も出来上がっていた。

金城幸氏とはすぐに連絡が取れ、こちらの趣旨を理解してくださり、琉球大学からは車で 15 分ほどのところに位置する西原南小学校音楽室で行われる地域連携教育授業「琉球箏ワークショップ」に学生を引き連れて参加することを快諾してくださったのである。筆者の担当する 4 年次用科目「教育実践研究」には、今年度は 3 名の受講生が登録。すべて女子学生で、前述の音楽ワークショップで子どもたちのインストラクターを務めていた学生たちでもあるが、実際の観察実習の前には、地域コーディネーターと学生たちとの面談を兼ねた顔合わせ会も行われた。この面談は、後述するように、外部者を学校内に呼び入れる際、地域コーディネーターとしては前もって行わなければならない、とても大切な調査でもあり、学校を訪れる人物がどんな人物かを事前に見極めておく必要があるのである。

さて、かつて東京都で全国に先駆けて、初代民間人校長藤原和博を立てた和田中学校において第2代の民間人校長となった代田昭久は、前代の校長からの、学校内での教育改革を継承発展させた人物だが、その著書の中で「地域本部がうまくいくための3つのポイント」として

①教員が一生懸命にかかわりすぎないこと、②教員が関わらないとはいえ、無関心ではいけないこと、③校長が、教員と地域本部との間をとりもつ蝶番（ちょうつがい）となること、を挙げている（代田、2014）。ここで言う地域本部とは、地域コーディネーターが所属し、定期的に会議を開催し、地域コーディネーターどうしの活動状況報告や内容の掌握、調整などを行なう機関の総称である。（西原町では、最近名称変更が行われ「学校支援地域本部」となっている）すなわち①に関しては、地域本部の活動は、教員をサポートし、負担を軽減するための組織なので、もし教員がこれに積極的にかかわりすぎると、地域本部の存在意義が薄れてしまうこと、かといって②に示すように地域本部の活動を、学校の仕事の単なる外注先・下請け作業にしてしまわないために、地域本部の本部長が、運営委員会や職員会議に出席するなどの、地域本部と学校教職員との綿密な関係性の維持、情報交換をすることが大切なのだとしている。そして③として、地域本部と教員という2つの組織のバランスを取り、両者の間に信頼関係が維持され、教育的にも同じ方向を目指しているかの舵取りを校長が行わなければならないと示唆している。

近年、学校教員の仕事は、忙しくなる一方で、それを理由としてか、新しいものに挑戦しようとする学校教員が減ってきてしまったと代田は指摘する。さらに代田は、その原因として、元来家庭教育において行われていたはずのもの、例えば、基本的な生活習慣や躾・礼儀までをも、学校で教えなければならなくなったことや、かつての学校や学校教員の持っていた「権威」が減退し、もはや生徒や保護者からの批判や非難を抑えることができない状態となったことを挙げている。教員が、こういった生活指導に多大な時間を割くことなく、生活指導をしなくても済むような予防線を用意するための時間を軽減し、教員本来の使命、すなわち生徒たちの「教育指導」にもっと専念できるように、代田は、「校内研修の廃止」という思い切った方策と並んで、地域人材の知と技を積極的に学校教育に取り入れることに着手したのである。

学校教育において、定められた教科書に沿っての教育をこなしていこうとする場合、例えば音楽科では、学校教員の得意分野・不得意分野（学生時代に中学校教員養成課程に限らず小学校教員養成課程に在籍していたとしても、4年間で声楽・器楽・作曲および指揮・音楽学・音楽教育学のどの分野を自らのピークとしたかに関係してくることが多い）に左右され、網羅的にすべての分野に行き渡わたらせた教育というものを実現しにくいという状況がある。かつての教育大学系音楽科や音楽大学で、専門技術を身につけると同時に教員免許を取った学生が教員になった場合、洋楽は教えられても邦楽や民族音楽になるとさほど詳しくは教えられないとか、声楽には自信があるので「歌う」授業は得意だが、器楽を「奏でる」授業は、どうしても浅い経験と知識でしか教えられないという「ムラ」が出来やすい。こういった状況において、それでも教員となったからにはその科目の各分野において偏りなく教えられるようにならなければならないとする傾向が生み出すのは、詮ずるところ、にわか仕立ての「なんちゃって」教育への傾斜で、あまり知らないことを付け焼刃で教えるような授業のこなし方に陥ってしまいがちなのである。初等中等教育の場において、もし専門性に欠けた教育をされたとしたら、それこそ児童生徒の方もいい迷惑というしかない。だがその一方、どの時代も、どの国でも、オールマイティーな教員がいたためしなど一つもないであろうから、子どもたちに本物の教育を提供するには、この点をどう打開していくかが、看過できない問題となっている。

この弱点を解決していく方策のひとつとして、地域連携教育が大きな力を発揮する。教員は自分の得意分野をしっかりと生徒たちに教えつつも、そうでないところは、地域のエキスパートを地域コーディネーターの紹介と校長の許可のもとに登用し、その力を借りて、不得意分野の授業

を地域のエキスパートにリードしてもらいながら、教員自身もこういった授業のコーディネーターに回りつつ、これを観察し教員自身の成長につなげることができるのである。

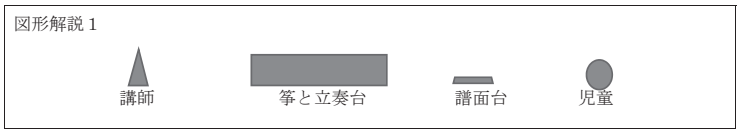
それではケース・スタディーとして、実際に西原町内の小学校において行われた地域連携教育の例を見てみよう。下記の記述は、筆者がこの音楽授業の現場に、実際に自らの「教職実践研究」の受講生 3 名を率いて参加し、観察しつつ記録を取ったものをもとにしている。

2.0 地域連携教育の事例

2017 年 5 月 11 日に西原町立西原南小学校（小規模校なので各学年 2 クラス編成）において行われた地域連携教育の実態を述べる。対象学年は、小学 4 年生の 2 クラス。西原町箏曲部会による小学生への箏曲実演と奏法ワークショップである。

西原町箏曲部会より、H 会長他、箏曲奏法インストラクターを含める 5 名が琉球箏を携えて来校。この日のワークショップは、次のようなプログラムで行われた。

1. 講師自己紹介
2. 箏について―「箏」と「琴」の違い
3. 箏の歴史について
4. 本日の演習曲「瀧落菅攪（タティウトゥシスガガチ）」の会長及びインストラクター全員による模範演奏
5. 子どもたちへの奏法指導



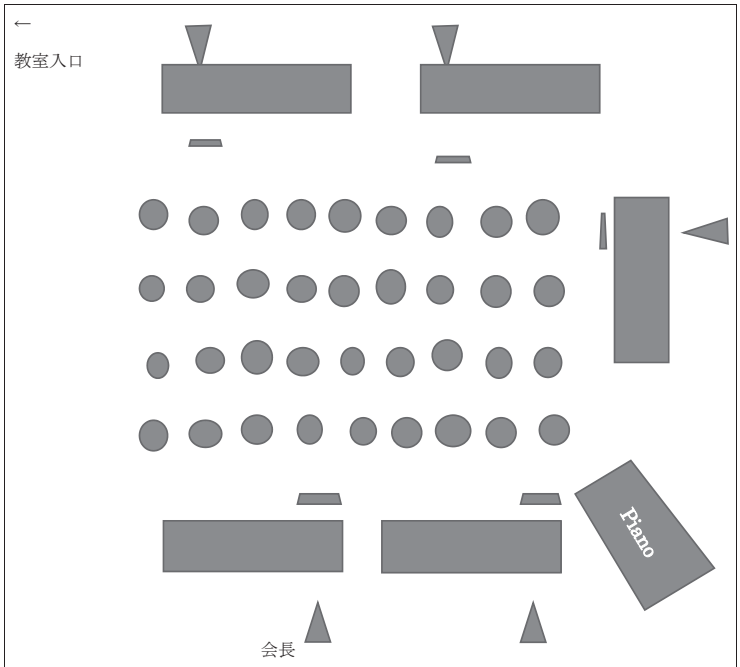


図 1 ：開始時の配置

上記の１～４までは上図のような配置で、冒頭、主に会長が講義形式で説明を行ったが、特に２の「箏について―「箏」と「琴」の違い」＝音的に同じ「こと」と呼ばれても、駒のないものを琴と書き、駒のあるものを箏と書く」と聞き、これは特に子どもたちの印象に強く残ったようであった。また３については「現代の琉球古典音楽においては、三線、笛、胡弓、太鼓に箏を加えた５つが用いられている」との説明もあった。

児童にとっては、床に座ったままでの長い講義形式は退屈なものになりがちであるが、会長ほかインストラクターたちは、その点をよくわきまえており、要点のみに軽く触れるだけで、専門的過ぎる細かい点は省き、できるだけ子どもたちに楽器の音と演奏を聞かせ、楽器に触れさせるという鑑賞面・実技面を重視して進められた。

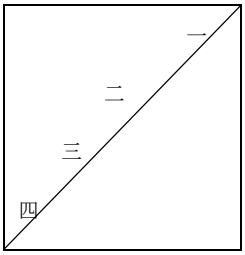
実際にプログラム４番の「瀧落菅攪」の模範演奏が、会長を含むインストラクター全員が合奏（と言っても、箏独奏を５人がユニゾンによる演奏）し始めると、子どもたちは珍しそうに耳をそばだて、講師たちの手つきに目を向けたりと興味津々の様子であった。

「瀧落菅攪」は沖縄では誰でもよく耳にする琉球古典の代表曲であるから、沖縄の各市町村、例えば町内会などの古典音楽・琉球音楽保存会の演奏等々を、子どもたちも何らかの機会に公民館や広場、町会の催し物などで、よく耳にしているだろうが、どの演奏も多くの場合、古典楽器の合奏の形、或いは三線の独奏として聞くことが多い。今回の地域連携教育の場では、これを箏のみの群奏で聞くというところに、子どもたちは目新しさを覚えたものと思われる。

さて、この模範演奏が終わると、プログラムの５として、子どもたちは５～６人ずつ、それぞれの講師の周りに集められ、まずは間近で講師の手の動きを見てから、本日の「瀧落菅攪」の冒頭部分を、一人一人付け爪を指にはめ、実際に弾いてみることへと移っていく。

箏演奏には、付け爪をしなければならないが、大人用のものでは子どもにとっては大きすぎるので、講師たちは、子ども用の爪を多種用意してきており、そのつけ方から指導に入り、次に、琉球箏は13弦あり、奏者から一番離れた弦（低音弦）から、奏者の一番手前の弦（高音弦）へ向かって、「一、二、三、四、五、六、七（シチ）、八、九、十（ジュウ）、斗（ト）、為（イ）、巾（キン）」と名前が付けられていることを教え、この弦に与えられた数字がそのまま箏用工工四に記されているものと一致していることを教えた。

さらに工工四に指定された４つの弦を斜めに手前方向に「そぎ弾き」を行う、ソンの弾き方を表す記号の例を示し、



工工四に書かれている記号のうちこの「ソン」の説明をおこなう。次に、工工四に従って、「五五三ヵ（チンと呼ぶ）」の弾き方を教える。一人の児童が弾けたら、次の児童に交代する。

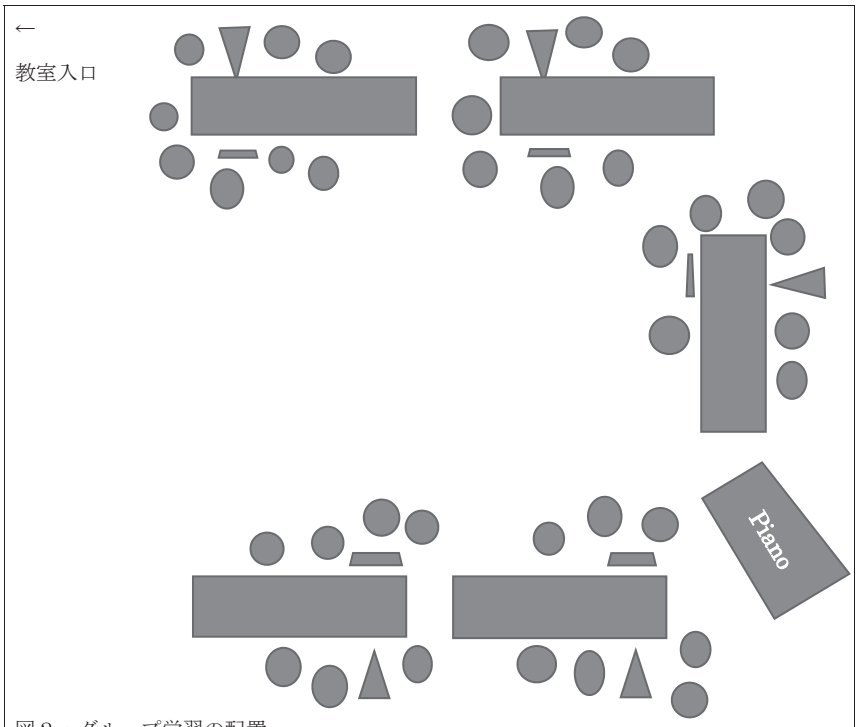


図２：グループ学習の配置

当日は琉球新報社からも取材が来ており、筆者も、琉大音楽科から参加した見学学生の一人と主に、比嘉会長のグループにいたが、我々年長者３名にも箏演奏の体験をさせてくれた。大人は子どもに比べて一般に理解と模倣がうまいので、我々が弾いてみせると、子どもたちはますます関心を持って、次から次へと「やりたい、やりたい！」と言い出し始めた。

大体１グループ５～６名の子どもたちがほぼ２巡するまで進み、本日の体験学習が終わった。最後に会長からのまとめと子どもたちからの感想発表があった。

その中で会長は「伝統芸能というものは、教える人がいても、習う人がいなければ、その伝統は途絶えてしまうのです。ですから、今回、琉球箏を実際に弾いてみて、その弾き方や音色に興味を持ったひとは、是非こういった伝統芸能をならって、受け継いでいってもらいたいのです」と語った。

４年生の前半クラスの児童からは次のような感想が寄せられた。

・「音を鳴らす時に使うのが、ほとんど親指だということに気付いた」
・「どこで親指を使い、どこで人差し指を使うかが分かった」
・「弦が 13 弦もあるので、どの弦かをすぐに判断できにくかった」
・「最初の『ソン』は、撫でるように弾く、ということがわかった」
・「箏の弦を弾くときに楽しかった（演奏を見たり、聞いたりだけよりも、実際に自分で楽器に触れて音を出すことができたことがうれしかった）」

（本論 I-1 は、紙面の関係上、一旦ここで区切るが、続編として I-2 へ進むものである。）

引用・参考文献

・浅川哲弥、磯田文雄他 北海道教育大学旭川校地域連携フォーラム実行委員会編「地域連携と学生の学び―北海道教育大学旭川校の取り組み」協同出版 2013
・萩原誠「地域と大学―地域創生・地域再生の時代を迎えて」南方新社 2016
・樋口利彦他 地域と連携する大学教育研究会編「地域に学ぶ、学生が変わる―大学と市民の創る持続可能な社会」東京学芸大学出版会 2012

参考サイト

・文部科学省 HP：
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337016.htm